



## いざなうコスモスの花

昭和六三（一九八八）年一〇月二七日午後一時、二〇キロ先まで商品配達のため出かけることになった。妻も一緒に行きたいと言って、慌ただしく着替えをして出てきた。いつもと様子がガラリと違っているのに驚いた。

ズボン、コスモスと思える花柄模様でびっしりだし、シャツといえば、これまた小さな花の図柄でぎっしり織られている。いかにもコマンド兵を思わせる迷彩色に見えて、少々辟易気味になったが黙過して出発した。

一五キロ程走った頃から川の堤防を走るようになった。眼下には、キラキラ輝きながら滔々（たぎや）と流れる最上川が目に入り、広大な風景に心ひかれたかと思ったら、今度は、路肩一面が花畑に変わり、そのあまりの美しさに運転も忘れがちになるほどであった。

そこには、コスモスの花が、赤・白・ピンクなど多彩な色合いで咲き誇り、花の屏風

は延々と続いていった。

咲き揃う花園を見た妻は、感動のあまり身を乗り出して

「すごい！」

と、我を忘れて叫んだ。それが何であるか私には分かった。コスモスの花と衣服の花柄は互いに共振共鳴し、妻の魂の中から燃え上がったのである。

ただちに車を止め、妻はコスモスの花畑に分け入った。風で揺らぐ一面の花が、無言の喜びを分かち合っているかのように感じられた。妻は花の精气に包まれて、子供のように心うきうき感動したのである。

コスモスの花といえば、いかにも秋を締めくくる錦絵となって道行く人々の心を安らげてくれる風景である。

どうしてこのような現象が起こるのであろうか。一口で、透視的共時現象ともい

えそうだが、「透視」という神秘用語に私は馴染めないのである。

花というコスモスの心性波動と、妻の心がなぜ融合したのか、二〇キロ先の遠隔の地で、どうして待ち合わせをしたのであろうか、その謎解きは、あくまでも妻自身の意識状態の位置にあると思える。

植物の心性波動に心の位置を置かなくては、コスモス群と、そのエネルギーの共振共鳴はできないであろう。植物の心性エネルギーと同調する意識とは、と考えた時、はつと気づかされる妻の言動があった。

「私には機械はいらないんです…」

さらにまた、「米の心で生きているから…」などとさりげなく言っていたことがある。いわば、植物の心性波動と同調できる意識にあるといえる。

ここで、いのちというものを端的に考えたとき、まず宇宙生命があつて、その中に地球生命がある。その地球生命の体温の中で密接に生きている植物生命がある。植物は大地に根を下ろし、地球生命の情報を微細にキャッチし、また地上では、枝や葉や幹によって宇宙生命の情報をこれまた微細にわたってキャッチしている唯一の生物であろう。

いのちの最前線といえはこの植物たちであるし、他の動物たちは、大地から離れてい

てひたすら植物を食うことで生命を繋ぐ生物といえる。生命界の情報量において動物は植物には到底及ぶものではないし、ましてや、知性を最大の武器とする人間は、自然界の生命エネルギー情報のキャッチにおいてきわめて退化傾向にあるのではないか。そのことは、自然力、そして、自然智という感覚から次第に遠のくことを意味する。

人知の独走だけでは、バランスに狂いが生じやすい。余計なことかもしれないが、人知に乗って自然智を外れずといったところである。

偶然の一致と思われる共時性現象は、生命の最前線ともいえる植物が、人間のいのちに転換する次元で多発する現象と考えている。

私は、人間なら植物である食物（米を中心にした五穀・野菜など）が口から入って胃で燃えて小腸で人のいのちに転換される最前線を、“生命エネルギー転換次元”と考えている。いわゆる原子エネルギー次元と考えるし、意志性波動をもつ次元と考えているのである。この霊的次元が万物普遍の情報源であると思っている。コスモスの花から発せられた色彩の心性エネルギーは、妻の境地の次元と共振共鳴していたのではないだろうか。

何か動けば何かが動く…

誰か動けば誰かが動く…

左に回せば右に回り…

右に回せば左に回る歯車同志…

高気圧・低気圧・気象リズムの仲の良さ…

作用あれば反作用あり…

こうした相対性の働きは、いのちの本質（宇宙絶対調和力）に根差す生命世界（この世）の普遍力だと私なりに認識をしている。まさしくこの世はひびき合いの世界なのだ。ビリヤードのような玉突き現象にも似て、そして、永久的で決して止まることなく、一方に偏在させることもなく、一極に支配させることもなく、この世は右へ左へと蛇行

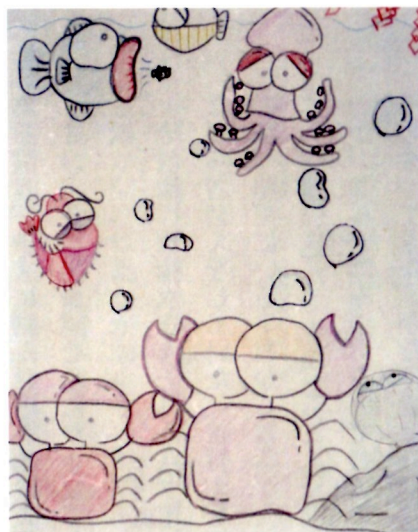
の流れであっても、決して中心から外れて一方向偏重の世界になることは無い。

悪も善もまとめて中心に戻す働きこそが、生命の本質であると考えている。この世は原子のひびき合いなのだ。

また、私たちが生きていくうえで食物の元素こそが生命原子エネルギーといえるし、食によってこそ存在できる我々こそ原子のひびき合いに支配されている身の上でもある。そして、錯綜混沌としていても生命の軸を失うことは決してあり得ない。いのちある限り、十字に結んだ中心軸を失うことはない。

このような生命感を私にかき立てたのは、次の共振共鳴の現実を見たときのことである。

それは、昭和六三（一九八八）年一月一七日午後のこと。この日妻は、そわそわしながら着替えをしていた。着替えを終えて見ればみどり色の上着であった。ちょうどその頃、関東にいるT君から電話が入った。勤務先の“みどり美容院”の中に“二匹のカニ”が迷い込んできたというのだ。カニは川や海にいるもののだが、ここがどこなのか、あるいはみづくろいでもしたいというのか、こともあるうに二匹のカニがかさこそとやってきた。かたや妻はみどり色の上着に着替えていた折のこと、四〇〇キロも離



れた関東の、みどり美容院にカニが二匹店の中に入ってきたという奇怪な話だ。

T君は、何か変わったことがあると電話をかけてよすが、この日の場合はそれだけでは終わらなかつた。その翌日のこと、市内のA子が一枚の「絵」を持って訪ねてきた。その絵というのは、小学生の弟が描いたという二匹のカニの絵である。それは前日に描いたものだった。弟がよく絵を描いていて、とくに魚やカニなどの絵が好きであつたから、A子は、私にもカニの絵を描いてくれないかと、何げなしに頼んだら「二匹のカニの絵」を描いてくれたので届けたくなつたというのだ。その絵を見るとなかなかの楽しい絵で可愛らしいものであつた。そんな具合で

みどり色の上着姿の妻：

T君とみどり美容院と二匹のカニ：

A子と二匹のカニの絵：

という、天から降つたか地から湧いたか、三人三様の行動が、単一の点と点が線となり、三重に結び合うことになつた。

「みどりという色」「カニという文字(象形)」「二匹という数」「すなわち文字・数・色という表現手段は、人間社会には無くてはならない不可欠の三種の神器である。

この三種の神器の文字・数・色は、個人個人から発する心の波(心波エネルギー)に乗つて、同時に時空を超えて受信者の心をノックする。それは、テレビ・ラジオ・電信などのごとくに、受信者の心の扉をひらき、心の映像スクリーンに映し出す。心の扉は直感智の扉だ。そして、文字や数や色などに転換するものと考えられる。

ある人がある人に何かを伝えたいと思うことは、相手の、心のチャンネルが開かれている限り、即時即刻リアルタイムで、夢心地に、直感智となつて閃きが惹起しやうきされる。

この世は、錯綜混沌とする電波・磁波・霊波の世界であるが、極微サイクルの差で、日常生活には混乱を招くことも無く生きていくことになる。これが、何もかもオールチャンネルであれば、いのちがいくらあつても足りることはない。パニックの連続だ。

おかげで万人の心のサイクルチャンネルは、ごく微妙にそのズレがあればこそ、難無くこの世を生きてゆくことができるという図式になる。一人一人のいのちは尊いものだ。



そんな夢を見た朝であったが、出かけるときは雷雨となっていた。雨具の用意も無かったので宿の方をお願いをしたところ、古い忘れ物の傘がたぐさんあるから好きなものを使って下さいという。私は真っ白の傘を手にしたが、これがいいと妻が手にしたのが、真っ赤な傘であった。その時私は今朝の夢を思い出した。「真っ赤」な口紅と「真っ白」の

何かを買うために席を外れ、戻ってみると並んでいたはずの妻がどこにも見当たらない。どうしたものかと少々戸惑っていると、なんと前列の奥からいたずらっぽいや顔をしてみよっこり現れた。その顔を見ると、まるで紅白の餅のような姿であった。真っ赤に塗られた口紅と顔の肌は真っ白の化粧が鮮やかだった。

## 天神様と文字と色のエネルギー

昭和六三（一九八八）年のこと、A子を天理に残して別れたのは、冷え込みも厳しさを増す一月二七日のことであった。ここまで三人一週間の旅であったがそこからは、妻と二人の旅となった。

今回は、最長二日間フルムーン切符を用意してきたので残り日数もかなり余裕があり、これからの道程は成り行き次第の旅となった。まず妻は着替えをして汚れたジーンズなどを小包便で家に送り、上着は赤色、ズボンは白色と上下紅白の身支度に整えていた。

その日は、福岡の知人宅に一泊のお世話となり、翌日の夕刻には太宰府市へと移動し、その夜は、ユースホステルに宿をとった。

翌朝未明のこと、私は夢を見ている。妻と二人で長い行列の中に並んでいたが、私は

化粧、そして手にした傘が「赤と白」。さらに昨日妻が着替えていた衣服が上下紅白という、どうにも気になる色合いであった。

その日は、かねてから訪ねたかった太宰府天満宮行きである。南無天満自在天神の神霊名で知られる、学問の神様で名高い「菅原道真公」が祀られている天神様である。

菅原姓のルーツをたぐれば、菅原道真公にたどり着くと聞くから、そのご縁には深い思いがあった。妻は菅原姓で私は旧姓長南姓であるが、これまた、そのルーツを探れば、道真公の第一一子直系の流れをくみ、現在の千葉県長南町にその発生の由来があるという。天神様には縁深い者かと思っている。

菅原道真公は、平安時代前期・醍醐天皇の世、右大臣の要職にあったが、権力抗争の渦に巻き込まれ、延喜元（九〇一）年左遷され太宰府の地でその生涯を閉じている。承和一二（八四五）年六月二五日に誕生され、延喜三（九〇三）年二月二五日に逝去され、よわい五七歳であった。

この日、天満宮を訪ねてその建造物の色を見た時、朝から気にかけていた紅白のエネルギーがさらに増幅されることになった。境内に並ぶ建造物群は、壁は白色で木部は赤色なのである。神々の社はことごとく「紅白」の配色に彩られていた。拝殿前の梅でさ

え白梅と紅梅というめでたい紅白エネルギー。それはとりもなおさず道真公の潔白無実の証しなのかとさえ思い知らされる。この日は、目一杯の時間をとり天神様の聖地で過ごすことにした。

境内には、楠の木の巨木が所狭しと立ち並び、その威風壯観には感嘆させられた。黙して刻むその歴史感は見事なものだ。奥の院の裏手にはこれまた広大一面の梅林があり、その中をゆく人々はなぜかタイムトンネルに入った気分になる。ところどころに点在する茶屋がやさしく迎えてくれる。その一つで軽く休憩をとることにした。あんこ餅にきなこ餅も、ここでは一層風情があつて時の経つのも忘れがちとなる。三時過ぎには博多駅に出なければならぬから、重い腰を上げて、ときおり小雨降る曇り空の中、私たちは帰路に立つ。

奥の院の近くを通り過ぎようとしたその時であった。私は右手に一瞬確かな心圧を感じた。くの字になるかと思うほどに引き寄せられる感じにハツとする。妻にそのことを話し、ここには何かがあるから寄ってみたいと言った。そこは奥の院、道真公一統のおたまや（御霊屋）が立ち並ぶ聖廟である。目をこらして廟名を見た時、ハツとした。

「菅公・四男 淳茂、霊を奉祀す」



と記されているではないか。これが引き寄せた発信源であった。「淳茂」の文字に即応するように、私が「茂」で、息子が「淳」であるから、親子の文字がぴったりくるではないか。文字は魂の依り代なのだ。

文字（象形その他も含む）・数・色というのは、現実の世で、最大有効な意志の表現手段であると同時に、声なき声の無意識世界（潜在意識⇨靈魂）の発現する表現媒体でもある。文字や数や色は、表面世界での発現発信手段に限らず、裏面ともいえる靈魂世界からの発現発信手段でもある。少なくとも私はそう信じて生きている。

何げない旅の中でも気を留めていると、意外なことに直感智が働くことも多くあるもので、それが鍵となつて、目に見えない世界が目に見える現実シグナルとなる。

この世では、過ぎたことは過去であり、死んだ者は消えて無くなるというのもそれは真実だ。だが、何かに気づくことも大切なことだ。現実的に直言するならば、自分の本体は、生命本体に宿を借りている自分の過去意識と亡き靈魂という魂の世界といえるだろうし、言い換えれば心の歴史博物館といったところだ。その複合霊体の船頭ともいえるのが今の自分ということになる。だから、今を生きる自分は、魂を乗せたいのち船頭さんであるのだ。生きる原点（心の原点）、すなわち、食うことと息をつくこと、

すなわち、「食と呼吸」の大切さに気づき、初心に返り、生きるいのちの大本に心を寄せて今日を生きたいと思う。この話を、元の流れの天神様とのご縁に戻してみると、縁や運命というものの裏方にはそれなりの「いのちの裏時計」が働いているということであり、それを知って生きることが大事なことだ。天神様での靈魂のシグナルを列記すると

旅の途中で妻が着替えた 赤色と白色

夢の中の妻の口紅と顔の化粧 赤色

と白色

ユースホステルでいただいた傘が

赤色と白色

天満宮の建造物が 赤色と白色

神殿前の梅の木が 赤色と白色

という紅白エネルギーを、魂の意志表現媒体として、私たちをこの地にいざ

### 天地普遍の縁エネルギー

なっている天神様（菅原道真公）が目には浮かぶ。さらに、身を引き寄せて知らしめた菅公一統の靈廟に祀る菅公・四男「淳茂」靈と、私たちの親子の文字「茂と淳」という文字エネルギーを媒体化した靈魂がある。このような縁エネルギーは、人類存続の限りあり続けると思っている。この根源的エネルギーは、いのちの食が胃の腑で消化されて、小腸で吸収される生命転換次元からそのひびきを発するものと考えてみた。そして、ここそが、生きる原点、心の原点であるだろうと思うのである。

世に出会いの灯がともり  
行く先々に灯がともり  
寝ても覚めても夢うつつ  
目に触れて  
耳にさやけしいざなうひびき  
肌にふれ  
匂いゆらめくそこそこに  
食べて感じて手で触れて  
目に満光満色星の数  
世に果てしなく出会いの縁は



永遠とわにいのちのある限り

テレビのブラウン管に映し出された一人の御仁。それは、NHK-TV、日曜美術館で信州新町美術館が紹介された時のことであった。昭和六三（一九八八）年七月二一日の放映である。それをじいっと見ていた妻が、「あつ」と大きな声を発してから言葉が続けた。

「そこに行きたい！ この方と会いたい！」

それは、美術館長の「関崎房太郎」氏であった。私は、はなからこの番組をフィルムにコマ撮りするつもりで三脚にカメラを据えておいたから、きちんと収めることができた。それから四カ月後の一月二一日、別の用件で旅に出ることになり、この時妻は、その時の写真をバックに入れて持ち出していたのである。金沢に立ち寄った後、写真の美術館に回るようになったが、目当てとなるものは一枚の写真。長野市近郷のようであるから、取りあえず長野駅へと直行したのである。金沢発一一時二八分・白山二号に乗り込み、四時五〇分、長野駅に到着した。

写真をたよりに駅の案内で行き先を訪ねると、とんとん拍子で知ることができた。ここから車で走ること二〇キロの道程という。駅からはバスもあるのだが、時間の余裕があまりなかったからタクシーで走ることにした。運転手の話によれば、その方はこの地方の指導者で、村長時代を経て町長になり、退職後は、美術館長などの要職についている名士であることがわかった。これはどうなることかと、今訪ねようとしていることに心がさわいだ。写真一枚持って、それも四カ月も前のテレビ番組から撮った写真を持って、ただ何の理由もなく「会いたいという一念」の緑のエネルギーにいざなわれてやって来た者。前代未聞の変人と思われて当然だ。

車は山間を縫うように曲がりくねりながら、四、五〇分ほどで美術館に到着した。これから先、長野駅に戻れるちよūdよいあんばいの連絡はないからタクシーを待たせておいて、私達二人はそそくさと受付の前に立った。そこで訪ねた訳を伝え、写真を手渡してそのまま入場すると、何かと気の馳せる思いで一巡した。

ここは有島生馬記念館にもなっていた訳で、それとも知らずに入場していた。有島氏は洋画家であり文学者であり、兄弟三人（兄・有島武郎、弟・里見惇）の、すぐれた文学者一家であることを知った。

ところで、妻がこれほどまでに「この方」に会いたいといって火花を散らしていたのは、館長の「関崎房太郎」氏であった。

受付で理由なき一枚の写真を届けてはみたが、その帰り際のこと、この出会いの真髄に触れることができたのである。

帰りを待っていたかのように館長が現れて、館長いわく、ここは五時閉館だが心がさわぎ、かつてない早退をすることにしたとのこと。三〇分は早い四時半の早退。そして話は回り始めた。

「自分は、八一歳になり、四二年間館長を務めているが、早退したことなど一度もなかったのに、今日はなぜか心が動いた」

という。ここで妻は静かに館長の生年月日を尋ねた。すると館長は、

「明治四一（一九〇八）年一〇月八日生まれの八一歳です」

と言ったから妻の驚きは尋常ではない。

「館長さん、私も昭和九（一九三四）年の一〇月八日生まれなんです」

と言って、一瞬感極まりて館長に抱きついた。

館長が一〇月八日生まれの八一歳…、妻も一〇月八日生まれ…。

この広い世の中、国内だけでも数十万人とも一〇月八日生まれはおられると思うものの、それじゃ探してみるかとなればこれまた至難のことである。不可能に近くなる。そ

れがなぜ、いともやすやすとそれも劇的に、酒田からここ長野まで距離にすれば四〇〇〜五〇〇キロを一瞬にして引き寄せる意志的エネルギー。否、それは必ずや、ある意志が働いたと思っている。

数の霊魂（数霊）が天地にひびきわたり、時空を超えて引き寄せたといえるものだ。縁のエネルギーは強大なものである。

テレビのメディアを通して、二人は奇遇の出会いとなり、待たせてあったタクシーで「館長のご自宅まで一緒にしませんか」と申し入れると、快く「ではお言葉に甘えてよろしく頼む」と言って同乗してくれた。車内で館長申すには、

「四二年間、参観者の車に乗せてもらったことなど一度もありません。全く初めての縁です」

という。関崎館長の思いの中からは、何かしら激しい感動を刻むひびきが伝わってくる。そのことを知らせるのかのごとく、後日丁重な礼状をいただくことになった。

非現実が現実となり

不可視が可視となり

現実の裏で働く真実



いのちほど神秘的な世界はない。見える現実の奥できらめく縁のエネルギー。満光満華の光で交差している  
眞実世界。出会いの秘密はどうもここにあるようだ。  
現実世界を紡ぎ出す裏方さんのその縁の発生源は、生命の本質、いのちの本体にその秘密が内在されている  
ようだ。まず、生きる原点を覗いたとすれば「食と呼  
吸」に行き着く。

食が生命に転換する次元

口から入った食物が胃で燃やされて

小腸で吸収され血となり肉となる生命転換次元

に、縁エネルギーの結びの神がおられるようだと考えてみた。そこは思えば思うほど、自分ではどうにもこうにも手のかけようもない不可侵の聖域なのだ。そこを生命のゼロ磁場の世界と私は考えた。

いのちの単位には、一体の生命体にしても、それを構成する細胞一つにしても、原子(元素)一つにしても、必ずやゼロの磁場があると思っっている。この命のゼロ磁場こそ万物

普遍の情報をキャッチできる次元で、人知ではコントロールできない次元ではないのか。

この世の億万兆の情報をキャッチできる次元のその接点を結んだ時、「あっ、この方と会いたいっ！」と、全身に閃きを発生させ、意識へと昇華されるのかもしれない。

共振共鳴共時の現象は、おおむね「文字・数・色」に分類されて、相互にその接点を結び合う吸引・反発の靈魂の働きと考へてもみた。その発生場がいのちの中心軸 $\parallel$ ゼロ磁場ではないのだろうか。

こうして私たちの、共振・共鳴・共時の旅は果てしなく続いている。